

再び輝くために自己変革を

2011年1月1日
社会技術革新学会
会長 増田 優

戦後復興と高度経済成長に続いて公害危機と石油危機を克服して、1960年代から1980年代にかけて日本は世界に類例を見ない成功を収めた。その原動力は、日々合理化に努力を傾注する中で地道に改善を積み上げる工場現場であった。しかし、1989年の東西冷戦の終結以来、世界情勢は激変した。グローバル化が進む中で、かえってこの工場現場を基点とした成功体験が足枷になっている。日々変動する情勢の中にありながら今日に至るまで、この成功体験を止揚する行動原理を見いだせないまま、狭い幅の中でこれまで通りの行動を続けている。時代の流れを100年速める画期的な業績は往々にして次の時代の進行を200年遅らせる原因になりかねない。歴史の教訓はこう伝えている。

人口が一桁違うことを考えれば国民総生産(GNP)において中国に追い抜かれるのは当然の帰結であり取り立てて語るほどのことでもないかもしれない。しかし、1990年代初頭にOECD諸国の中で第2位であった日本の1人当たりの国民所得が20位近くにまで転落し、世帯当たりの平均所得が過去15年以上にわたり減少し続けていることは、座視できない。グローバル化の中で国境という壁が低くなり、ものも人も金も自由に行き来する状況の中では、安いものが輸入され物価が下がるのと同様に、一桁低い海外の労働賃金に引きずられて同じ労働に対する賃金が低下するのは当然の帰結である。爪に火をともしような合理化努力や血の滲むようなコスト削減は決して悪いことではないが、そうした工場現場の努力だけに頼ってはいじわじわとしかし着実にジリ貧状態の陥ってしまう。工場現場に頼りすぎる日本の現状を転換する必要がある。

本日も管理者という名前のコスト要因であることをやめ価値を創造する経営の現場に転換しなくてはならない。営業も安売りを競い自らの価値を自ら引き下げてしまう役割から脱却して新たな価値を創り出す現場に転換する必要がある。技術が日本の生命線であるとの論調をよく耳にする。しかし、技術者は新たなビジネスモデルを開拓し本当に新しい価値を創り出しているであろうか。国民が育て上げた霞が関の秀才は、社会の管理者としてコスト要因として生きるのではなく、社会制度を変革し国際関係を再編成して他の誰もできないような価値の創造を成し遂げているだろうか。長期低落傾向の中で貧困が忍び寄り、全ての社会の現場が価値の創造に向かって活動する現場に自らを改革することが求められている。

こうしたためてみると、誠に残念なことに、何ら昨年と変わるものがない記述に終始してしまう。この一年間、日本の現実に何の変化の兆候も見られない証拠である。巷ではあいも変わらず厳しい就職戦線の報道が繰り返されている。これも昨年、一昨年と何ら変わらない。そして定年退職で多くの人材が社会の第一線から追われている。その価値を認めて活用しているのは、台湾、韓国、中国である。この状況もこれまでと何ら変わっていない。日本の生命線である技術の流失の大きな原因がそこにあるといわれて久しいが変化の兆しさえない。このままでいくと半導体や液晶パネルなどなどに続いて、リチウムイオン二次電池も日本の手から滑り落ち、日本が開拓したという歴史さえ忘れ去られかねない。

追走(Catch Up)の時代から先走(Front Run)の時代に移った日本において最も必要

とされている者は、専門家であることに満足せず社会を開拓し経営する資質を持った人材である。規範を遵守 (Rule Follow) することに止まらず制度を改革し社会を変革していく規範を創始 (Rule Make) する人材である。文系理系の枠に囚われることなく現実を直視し包括的な視点を持って自ら行動する人材である。便利で優しい社会の中で家畜化し、日本人の生活力の劣化と志の退化は著しい。危機的な状況である。

見渡す限り続く灼熱の砂漠の中にも、周囲数百kmにわたりガソリンスタンド一つない凍土の中にも、力強く生きる人々の営みがある。発展が著しいのは中国だけではない。日本が停滞しているこの 20 余年間にサウジアラビアの人口は 3 倍に増加し都市化が進んだ。砂漠に政令指定都市規模の都市がいくつも出現したこととなる。未だ地球上には多くのフロンティアが残されている。そして経済の世界にも学問の世界にもフロンティアは存在する。さらに社会のそれぞれの現場にはそれぞれのフロンティアが待っている。優しい社会における安穏な生活を断ち切って、大海原に船出する勇気があるか否かが問われている。

静穏な利根川を下る船に必要な人材は櫓をこぐ漕ぎ手である。日本における一番の大河とはいえ川幅は限られており航路の選択の余地はない。額に汗して力強く漕ぎさえすれば、他の船との競争に勝つことができる。しかし銚子の先端に到着した途端に状況は一変する。突如視界が 360 度開け、目の前に太平洋の大海原が広がる。ここで求められる人材も大きく変わる。先ず、金の島を目指すのか、緑の島を目指すのか、はたまた塵の島を目指すのか、目標を決定する人材が必要である。そして価値観の選択と目的の明確化それに加えて乗員全員を納得させる説得力が問われる。また、緑の島を目指す目標を決めたとしても、直線航路を取るのか、迂回航路を取るのか、その道筋を決定する人材が必要である。これらいずれの役割を担う者も、船内のことを微に入り細に入り詳細に知っていても、それだけでは機能を果たせない。海洋気象の状況、海賊の出没状況、世界の金市場の情勢などなど諸々の船外の情報に通じ、これを理解して判断を下し得なければならない。

包括的な資質を兼ね備えなければ大海原に雄飛することはできない。行き先の島と到達するための航路を決められなければ、折角一番早く銚子港に到着したとしても、すぐごと利根川を後戻りするしか道はない。船底で日夜額に汗して決まった通りに櫓をこぐ快楽を投げ捨てて、世界に飛び出し不確実性を恐れることなく自ら物事を決定する志が問われている。技術革新だけに頼ることなく制度改革、社会変革そして人材改新につなげ、目的の達成を目指して大海に船を進める勇気が問われている。船上の船橋にいる船長と航海士の資質の向上なくしては、船底にいる機関士や船員の努力は報われない。

